
強がりにLOVE ME

浅色ミドリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強がりにLOVE ME

【Nコード】

N7808F

【作者名】

浅色ミドリ

【あらすじ】

高校三年の大晦日。冬休み真っ最中だというのにあたしは補習を受けていた。それも小学生レベルの内容で。

今日は冬休み。

いいえ、むしろ1週間前から冬休み。

今日は大晦日であり、年末で最も忙しく、最も暇な日。

家の掃除をしたり、豪勢な食事を作ったり、今年最後の安売りに出かけたり。

他にも友達と騒いだり、初詣のためにかわいい着物を見繕ったり。だというのに。

「おい、聞いているのか近藤！」

何であたしが補習なんて受けなきゃならんだ！

「きいてませーん」

「ふざけるな！」

怒鳴られてもたいしたことはない。いつものコミュニケーションなのだから。

顔から湯気でも出そうなくらい怒ってるやつが、担任のタチバナ。なんでも東大を主席で卒業した超エリートで、金持ちのボンボンらしい。

休み時間の廊下でそう僻んでるハゲオヤジ達の話の小耳に挟んだのだからきつと間違いない。

やつらのヒガミはねちっこい。老体から出る脂みたいに。

そのねちっこさは正しい情報ゆえのヒガミだと、あたしは知っている。

一通り吐き出してようやく落ち着いたらしいタチバナが補習を再開する。

「ったく、いいか？5962を44で割ったら135.5になる。

この”.5”が割り切れなかったいわゆるあまりというやつだ」

今、小学3、4年生の算数の授業を受けている。

なぜ受験前の高校三年のあたしがこんなことしてるかというと、

根本的に出席日数が足りなかったからだ。

授業日数が足りないのなら普通は高校3年レベルの授業をするはずだとお考えのあなた！

それは大きな過ちに足をつ込みかけてると何故気づかない！いや、あたしは何を言ってるんだ。

元々、この学校には勉学特待生として来たあたし。

自慢じゃないが、成績はどれもトップ。

もちろん今だって学年では一番をキープ。

授業の間違いだって指摘する、なんて才女なのかしら！オホホホホ。

「気持ち悪い顔で教科書をまじまじと見つめるな。怖いぞ」

黒板にかじりついていたタチバナに怒られた。

てか花の乙女に向かってなんて口を……。いずれあの減らず口を半返し縫いで縫ってやる。ついでにしつけ糸もしてやるから感謝しろ。まったく。

ぶっちゃけ東大も楽に受かるって言われたけど、そんなお金無し。

この学校で一番の貧乏だからな！えっへん。

ああそうだ、一つ手があった。

「せんせー」

「何だ近藤？」

ここでもやや上目遣いでアピール。

潤んだ瞳とやや谷間を見せればイチコロだと本には書いてあったけど、そこまでは恥ずかしくて出来ない。

「なんでこんなに一生懸命補習してくれるんですかあ？」

はあ、と非常に分かりやすいため息をつくタチバナさん。

「それはな、お前の出席日数が150日も足りないからだ！」

「でもおーそんな不良生徒ほっとけばいいじゃないですかあー。今日は大晦日ですよお？」

普段使わない媚び語を使うと疲れる、そろそろ限界に来そうです。

助けて！アンパンニヤン！

「俺もな、帰りたいのは山々なんだ。でもな、お前ももう18だ。大人の世界の厳しさつてのも分かるだろう？」

同情を誘おうと渋い顔をしてあたしの肩に手を付く。

チャンスだ！

「きゃっ！」

「あ、ああすまん」

オーバーリアクションで身体を引き離すあたし。うまいぞ。もじもじしながらゆっくりタッチバナの顔を見上げる。

「お、おい」

うろたえたタッチバナが見える。

うんうん、よく見ると中タイケメンではないか。新任のフレッシュユマンだし。

「あ、あのお」

「な、なんだ」

数秒間を空ける。じらすあたしもなかなかイケてるんじゃない？

「せんせえ、あたしのこと好き、なんですか？」

決まった！心の中でガッツポーズをとる。

これでもう補習なんてしなくて済む、はずが。

「冗談はそれくらいにして、次のページひらけ、な？」

なんてさわやかな笑顔。逆にむかつく。

机に手をついて立ち上がったらダン、と音を立てた。意外と強く叩いてしまったようだ。

「えー！だって普通ありえないじゃないですか！こんなにかわいくて美人で頭脳明晰で気立ても良くて人望も厚くて、けれど貧乏で恵まれない少女を見ていて良心が痛んだ新任教師が恋に落ちて救いの手を差し伸べる！とかありありじゃない？」

「自分で言っな、自分で！」

鼻から湯気でも出そうなくらい力説してしまった。

「そもそも授業してやってるのは教と……、お偉いさんから頼まれ

てだな、類稀な頭脳をこのまま埋めておくには惜しいといわれて渋々付き合っただってなんだよ」

渋々、付き合っただってなんだ、なんだその亭主関白さ加減は。

「はあ？教頭の犬かあんたは！教頭がパンツ脱げていたら喜んで脱ぐのか？！」

「なわけあるかあ！第一教頭とはいってないだろう教頭とは」

「言いかけて止めたことくらいお見通しなんだよ！！誰に向かって口利いてんのかわかってんのか！！」

「担任が生徒を教育するのは当然だろうが！！そもそも俺はお前のことを思っただな」

「教育だあ？！あたしの事思っただあ？！」

とまるでレディースみたいに巻き舌でしゃべっていたが、そこまで言っただけであたし。

「そつだ、お前のことを考えて」

「タチバナ先生！」

そつだ！これはどう考えてもアレじゃないじゃないか。

「な、なんだ」

突然名前を叫んだのは効果があったらしい。

あたしは彼の気持ちに伝えなくてはならない。

「あたしの玉の輿になれ！！」

ネクタイをぐいと引つ張って顔の近くで言う。

金持ち、イケメン、新任、ウブ、そしてアタシの奴隷。

あたしに天使が舞い降りてきた！

「は？」

「いやだから、あたしの事そんなに好きだなんて思っただけだったから、その、ついヒドイこと言っちゃって」

「いやまてまて」

あたしのハートは待てない蒸気機関。

列車は急には止まらない

「ごめんね？良い奥さんになるから！子供はサッカーチームが出来

るくらいほしい、カナ」

なぜか視界が揺れた。

叩かれたのだ！頬を！平手だけど！

「なにすんのよ！この奴隷！」

「誰が奴隷だアホ！俺は好きとも結婚するとも一言も」

なんだ、ただの照れ屋か。

「あたしがシャイな心を察してあげたんじゃないか」

「あほかあああああ！」

とそこで、ガラガラガラと教室のドアが開く。

学校には二人つきりのはずなのにと、思って振り向くと、クラスメイトで一番仲が良い美保が立っていた。

からーん、と音を立ててテニスのラケットが落ちる。

「先生の甲斐性ないいいいいい！」

涙声で廊下を叫んで走っていた美保。

彼女もこの夕チバナが好きだったようだ。

まああたしの旦那だ。

ネクタイをひっつかんでるあたし。

制服のリボンを捕まえてるタチバナ。

しばし沈黙のまま美保が去っていった場所を見つめていた。

「今日は、もう帰っていいぞ」

少し元気の無い感じでそう話す夕チバナ。

それから3年後、見事あたしはゴールイン。

もちろん旦那はかつての担任タチバナ。

その後、始業式の日、「新任教師、女学生を淫行」というとんでも誤解されたニュースが全国報道された。

タチバナはもちろんのこと、あたしも誤解を解くのに必死になつて、何より母親の誤解を解くのが一番苦労した。

あたしに負けず劣らず思い込みの激しい母親。

父親は、ニュースが広まったその日に「幸せになれよ」と、肩を叩かれ激励された。

そして初めての共同作業で誤解を聞いたあたしたちは、次第に心惹かれあつたのだ！

「合言葉は、あたしの玉の輿になれ！」

（後書き）

ノリだけでノリの良いやつ書きたくなって
ついやってしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7808f/>

強がりにLOVE ME

2010年10月8日15時08分発行